

スタートアップとオープンイノベーション

弁護士
清水

亘 Wataru Shimizu

I はじめに

日本政府は、2022年を「スタートアップ創出元年」と銘打ち、同年11月には「スタートアップ育成5か年計画」を発表する等、各種の政策を進めてきた。いわゆる「失われた30年」を打開する方策として、イノベーション創出の主要な担い手としてスタートアップを位置付けたのである。

イノベーションには様々な定義があるが、例えば、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の「オープンイノベーション白書〔第3版〕」¹によれば、企業等にとってのイノベーションとは、「開発などの活動を通じて、利用可能なリソースや価値を効果的に組み合わせることで、これまでになかった（あるいは従来から大きく改善された）製品・サービス等の『価値』を創出・提供し、グローバルに生活様式あるいは産業構造に変化をもたらすこと」をいう。「技術革新」と翻訳されることもあるイノベーションであるが、新しい技術を生み出すことがイノベーションではなく、グロー

バルな市場や社会に新しい変化をもたらす製品やサービスを生み出すことこそが、イノベーションなのである。

もっとも、スタートアップをイノベーション創出の担い手と位置付けたとしても、資金的にも人材的にも発展途上にあるスタートアップが直ちにイノベーションを生み出すことは容易ではない。他方で、イノベーションをテコにして新たな事業の創出を目指しているのは、事業会社も同じである。

このような状況を踏まえ、スタートアップと事業会社等が協働することによって、課題認識を共有したり、相互に強みを補完しあったりして、新たなイノベーションを模索する動きが近時のオープンイノベーションである²。とはいえ、オープンイノベーションを成功裏に実践することは容易でなく、そのための心構えと工夫が必要である。今回は、スタートアップとオープンイノベーションについて検討する。

1 https://www.nedo.go.jp/library/open_innovation_hakusyo.html

2 世界で最も成功した著名なオープンイノベーションといえば、リーナス・トーバルズが中心となって開発したLinuxであろう。リーナスは、Linuxの開発に当たって、非営利・営利を問わず、誰でも自由に使用・修正・頒布できることとし、世界中の開発者の知識を取り入れる方法を採用した。これによってLinuxは、あらゆる方面に利用できる幅広い機能と柔軟性を獲得し、数多くのユーザの協力によって問題を修正していくことで高い信頼性を獲得するに至った。Linuxは、本文で述べている近時のオープンイノベーションに比べて、広い意味でのオープンイノベーションであるが、本稿はその違いについて論じるものではない。